

思春期体験学習の評価に関する研究—分担研究者総括—

分担研究者

清水 凡生

(広島大学幼児保健学教室)

はじめに

最近、妊婦の妊娠初期からの行動変容を研究した報告では、妊娠中に子どもへの愛着を感じるものは極めて少なく、出産後子どもへの愛着が十分育たないものが多いという。また、妊娠中子どもに対して抱いていた幻想的なかわいさが、出産後の現実のなかで打ち破られ、不安、いらだちを感じるものも多い。このことは、自分の子どもが生まれてはじめて子どもというものに接することが一般的である現代社会の中にあっては当然のことといえるかも知れない。しかし、このような状態の中において満足な育児行動は期待し難い。この問題の解決が要求されている訳であるが、思春期にある男女の乳幼児に対する感情は、子どもとの接触経験や親準備教育によって著しく好転するといわれている。

子どもの親となるために十分な準備状態を醸成させるための一助として、思春期にある中・高生に赤ちゃんの触れ合いを体験させる事業が市町村事業として厚生省から提唱され、全国各地で試みられている。しかし、これが期待された機能を十分果たしているか、子ども受容をかえって阻害していないか、最も効果的な学習方法はどのようなものなのか、また効果があるとすればいかなる機序によるものなのか、などといったことは未だ十分明らかではない。

今回構成された本研究班ではこれらの問題点を解決すべく多方面からの検討を企画し、さらに短期、長期にわたる検証を試みた。

親準備教育実践に関する国際的動向

わが国で実施されている思春期におけるふれあい体験学習の評価のための背景調査として、諸外国における状況を調査した。

文献検索データベースMEDLINEを用い、検索語

として思春期、親であること(parenthood)を選び、1989～1994年の6年間を対象として検索した。また、雑誌 Current Contents を用い、親であること(parenthood)を検索語として、1994年9月～1995年3月の6ヵ月間を対象とし、社会科学および行動科学関係の雑誌を検索した。

MEDLINEより上記条件にて検索された文献数は1989～1994年の各年でそれぞれ 15, 13, 7, 10, 6, 11 であった。これらの各々について内容を検討した。

母性、父性を含め「親であること」に取り組んだ内容を有するものは6件で、教育学、心理学的内容のものが多かった。

妊娠、避妊、人工流産、分娩、産褥等、reproductive healthに関する内容を有するものが多かった。また、性感染症(sexually transmitted diseases)やHIVに関連する性行動に関するものも認められた。

教育に関するものも、性教育を中心としていた。Current Contentsより上記条件で検索された文献数は21件であった。主として心理学関係の雑誌で、親(になること)への移行(the transition to parenthood)について扱ったものが多かった。1件のみ、思春期を対象とし、思春期の妊娠防止対策や親になることについての教育を通じて性による(負担の)偏重を減らすことをテーマとした論文があった

6年間の検索結果でみる限り、わが国で実施している体験学習に相当する活動については認めることができなかった。検索の結果、選びだされた文献の研究対象の場となっている国は、米国と欧州諸国が大半を占めたが、いずれの国々においても、若年妊娠の取り扱いに関するものが多い印象を受けた。すなわち、10代で親となった若者における親意識の形成やそれに関連する教育的活動などについて述べたものが多かった。

このほか、夫の妻に対する虐待がテーマとして散見された。

諸外国における体験学習類似の活動の有無を調査するには、思春期保健活動を担当する機関や団体をリストアップし、それらを対象に調査することが必要であろう。今回は時間の制約があり、このような調査を実施することはできなかった。

諸外国において、わが国で実施している「思春期における保健・福祉体験学習事業」に相当する、あるいは類似する事業があるかどうかについては、明確な情報を得ることができなかったが、今回の文献検索で全く認められないことは、ほとんど行われていないことが予想される。体験学習の多方面からの評価やその効果をもたらす機序を明らかにすることは国際的にも貢献するところが大きいであろう。

体験学習の評価に関する調査票の作成

思春期における赤ちゃんとの触れ合い体験学習の短期的および長期的な効果については、今までにも様々な質問票を用いて測定が試みられてきた。その中には「赤ちゃん」や「育児」に対する印象やイメージの変化を調べるための質問項目が含まれている。その多くは、実施や集計の簡便性のために、例えば赤ちゃんの印象について、「かわいい」、「やかましい」などいくつかの選択肢の中から一つを選択させるというような方法を採用しているようである。しかし、人がある対象に抱くイメージは必ずしも一面的ではなく、「やかましい」けれども「好きだ」というように否定的側面と肯定的側面が同時に存在しうる。したがって、体験学習の効果をより詳細に捉え、さらに体験学習が出産や育児などの行動にいかなる心理的機序で影響を及ぼすのかを調べようとすると、それらの対象に対するイメージの多様な側面を評価しうる方法が必要である。

本研究は、赤ちゃんや育児に対するイメージを多面的に捉えるための質問票を作成することを目的として行った。第一に、心理学におけるイメージ調査等でよく用いられる手法であるSD法(Semantic Differential法)によって、赤ちゃんや育児、あるいは父親、母親に対するイメージが、どのような側面から構成されているのかを調べた。第二に、それらの側面と、出産や育児に関する意識や行動と関係すると思われるいくつかの心理学的特性との関連について調べた。第三に、体験学習によって赤ちゃんや育児に関するイメージのどの側面がどのように変化するのかを調べた。これらの結果に基づいて、体験学習の効果を効率的に

測定しうる質問票を作成する予定であるが、第三の点については、調査対象とした学校のカリキュラム等の関係で現在も調査を継続中である。

調査では、赤ちゃんや育児に対するイメージがどのような側面(因子)から構成されるのかをSD法によって調べた。1994年11月～12月に、広島市内の大学生を中心とする成人(18～47歳、平均年齢20.3歳)376名に対して調査を実施し、男性53名、女性316名から有効な回答を得た。

調査内容は「赤ちゃん」、一般的な意味での「母」と「父」、「育児」の4つの概念について、表2に示す31の形容詞対(尺度)を用いてイメージを尋ねた。各概念のそれぞれが、例えば「非常に明るい」から「非常に暗い」までの7段階のどこに当てはまると思うかを直観的に答える方法で、回答を得た。調査票の配布、記入、回収は、講義時間等を利用して集団で行った。

各尺度における評定を1～7点で得点化(得点が低いほど肯定的評価)し、4つの概念をこみにして因子分析(反復主因子解、共通性の推定値はSMC、3因子を抽出後バリマックス回転)を行った。第1因子では、(生き生きした—生気のない)、(夢がある—夢がない)、(生きがいのある—生きがいのない)などの負荷量大きい。さらに(活発な—不活発な)、(おもしろい—つまらない)も大きな負荷量を示しており、これらの結果から、第1因子は現在の活動性と将来の発展・発達の可能性の両方を含んだ「力動感」因子であると考えられる。第2因子は、(責任がある—責任がない)、(強い—弱い)、(大きい—小さい)などの負荷量が特に大きく、「自立感」因子であると言える。第3因子は、(楽しい—苦しい)、(不安でない—不安である)の他、(明るい—暗い)や(のびのびした—きゅうくつな)などの負荷量が大きく、漠然とした「不安感」を表す因子ではないかと考えられる。

調査で行ったイメージ測定の結果が、調査対象を変えても安定して得られるかどうかを確認し、さらに、抽出された各因子が、出産や育児に関する意識や行動と関係するであろう心理学的特性とどのように関連するかを調べるために、2回目の調査を行った。1994年12月～1995年1月に、東京都および広島県内の大学生・短大生(18～23歳、平均年齢19.3歳)635名に対して調査を実施した。東京地区の女性176名、広島地区の女性213名、広島地区の男性240名から有効な回答を得た。

前回の調査で用いたイメージ評価に加え、山口(1985)による男性性・女性性の2側面に関する質問項目を加え、さらに、将来子供が欲しいかどうか

か、欲しいとしたら何人くらい欲しいかを尋ねた。なお、山口による質問項目からは、母性性、女性性(男に対する女として)、父性性、男性性(女に対する男として)、大人性(大人として男女に共通して求められる特性)の5種類の得点が算出される。

4つの概念に関するイメージ評価について、前調査と同様の方法で因子分析を行った。各尺度の因子負荷量を表2の右欄に示す。さらに各概念の各因子ごとに因子得点を求めた。なお、将来子供が欲しいかどうかの質問に対しては86.5%が「欲しい」と答えたが、他の質問項目との関連は調べることができなかった。

本調査のイメージ評価の結果は、前調査とよく似ていた。さらに、4つの概念別に同様の因子分析を行った結果、各尺度の因子負荷量の大小については多少違いがあるものの、因子としては同様なものが抽出された。SD法を用いたイメージの測定では、一般に「評価」、「力量」、「活動性」の3次元が抽出される。調査とで抽出された「力動感」は「活動性」に、「自立感」は「力量」にほぼ対応すると考えられる。「評価」に相当する因子は認められず、かわりに漠然とした「不安感」を表す因子が抽出された。これは赤ちゃんや育児などに対するイメージの形成において、知識や経験の有無や多少による不安感の相違が大きな役割を果たすことを示唆するものであり、興味深い。

体験学習の効果を評価するための質問票には、実施の手間等を考えると、あまり多くの項目を盛り込むことはできないであろう。両調査の結果を比較すると、各因子に対して大きな因子負荷量を示す尺度もよく一致しており、「力動感」、「自立感」、「不安感」などについて少ない項目でもある程度多面的な評価が行えると考えられる。

出産や育児に関する意識や行動は、性、地区(周囲の情報の質や量、あるいはライフスタイルの違いを媒介として)、あるいは母性性、大人性などの心理学的特性と関連すると思われる。表3をみると、それらのどの要因とも関連しない概念あるいは因子はなく、この点で体験学習の効果を評価するための質問票に取り入れなくてもよい概念・因子を指摘することはできなかった。

体験学習の効果を敏感に反映する質問項目を選定する目的で、体験学習に類似する経験である保育実習の前後の赤ちゃんイメージの変化を、これ

までの調査と同じ尺度を用いて測定した。

保育実習(1994年12月に実施、幼稚園児対象)を受講した女子大学生(20~21歳)20名に対し、実習の前後に同一のイメージ調査を実施した。両方の調査で回答が得られた16名を分析の対象とした。用いた尺度は前回の調査と同じであるが、実施時間の制限もあり、「赤ちゃん」と一般的な意味での「親」の2対象について回答を求めた。

前調査と同じ方法で各概念の各尺度ごとに得点を求め、対応のあるt検定によって実習前後の変化を調べた。赤ちゃんに対するイメージは、より明るく、にぎやかで、強く、のびのびとして、かたく、安定し、きたなく、活発な方向に変化した。親に対するイメージは、将来の目標があり、充実し、強く、複雑で、考え深い方向に変化した。

因子得点の推定値を求めるための重み係数として、調査で得られたものを用い、調査の各概念について因子得点を求めて、実習の前後で比較した。赤ちゃんについては「不安感」因子の得点が不安でない方向に変化し、親については「自立感」因子の得点がより力強い方向に変化した。わずか1回の実習体験でも、赤ちゃんや親のイメージが少なくとも短期的には様々な側面で変化したことがわかった。また、各尺度ごとの変化と因子得点の変化を比較すると親イメージの変化を、自立感の側面での変化として一括して捉えうることが明らかにされ、SD法・因子分析法を用いた多変量的アプローチの有効性を示すものである。

赤ちゃんに対する不安感の変化を、因子得点によって明らかにすることができたが、その反面、親イメージの変化が因子得点には反映されていないなど、因子得点だけでは見逃してしまう変化もある。どのような質問項目を組み合わせ、どのように集計するのが有効であるのかについては、現在継続中の調査の結果をみて判断したい。

触れ合い体験学習の効果は、本人や相手の年齢、体験の内容や期間、また学習後の時間経過によって、量的にも質的にも変わるであろう。したがって、その効果をよく反映させるためには、質問票の内容もきめ細かく変える必要があるのかもしれない。調査で、多面的測定のために適切であると考へた尺度の中には、体験学習による変化に敏感な項目も、そうでない項目もある。適切な質問項目の選定に当たっては、何が変化するかを探るといった観点と同時に、どのような変化を捉え

るべきなのか、すなわち、体験学習が何を目指し、何がどのように変化すれば効果があったと判断してよいのかという観点からの考察も必要であろう。

親になることへの受容に関する検討

思春期の男女を対象として乳幼児への好悪感情と育児への積極性、大人のもつ育児意識や親役割観、などについてアンケート調査を行った。

育児への積極性に関して、大学生女子を対象としたアンケートの結果は、子ども産み母になることに非常に積極的なグループと消極的なものに二分された。この両者は以前から子どもが好き、または嫌いとしているところに違いがあるが、幼い子どもと身近に触れ合う経験、好悪いずれともその感情を助長すると回答している点で共通である。しかし、子どもとの接触形態は、前者はベビーシッターや保育園の手伝い等でより個別的なかわり方をしているのに対し、後者は偶発的で漠然とした接触が多い点で異なる。また、女性としてのライフスタイルの認識のあり方が、親役割受容のあり方を左右していることが明らかとなった。親役割受容は積極的志向を示すグループには、男性と同等に社会参加する困難さを認識し、むしろ子どもを産み育てることを女性独自の適性と認識するものが多い。一方、消極的志向を示しているグループもまた、育児と社会参加との両立の困難さを認識していることで共通であり、結果的に子どもよりも就労を選択したいとしている。この調査結果もまた、親になることへの受容は、幼い子どもとの接触の機会とともに、青年期のライフスタイル志向と関連させて検討する必要性を示唆するものである。

現在の実施状況

体験学習は自治体を中心に各地域で試みられているが厚生省平成5年度の調査では、全国市町村のうち、36市130町25村、計191市町村で実施されている。本年度は、体験学習を実施している自治体のうち、主に関東地域の市町村で、これまでに調査できた2市(茨城県下妻市、栃木県宇都宮市)、2町(千葉県安房郡鋸南町、神奈川県城山町)、1村(群馬県勢多郡富士見村)についての実施状況をはじめ、内容及び問題点を分析・検討を行い、今後の体験学習の普及・充実に向けて何が必要となっているのかを明らかにした。

市町村のうち、市が体験学習を進めているケースとして栃木県の宇都宮市における実践を取り上げ、その現況や内容およびこれからの課題についてなど分析を行うことができた。まず、宇都宮市では平成3度の市町村母子保健事業のメニュー事業である「思春期における保健・福祉体験学習事業」を受けて、平成4年度からこの事業を開始している。その目的として、少産化。核家族化の進むなかで、乳児と接する機会が少なくなった思春期の子供たちに乳児と接する機会をつくり、生命の尊さ、性の尊重を学んでもらうと共に父性・母性の育成を図る、としている。

宇都宮市でも、少産化や核家族化が進み、中学生や高校生などの思春期にある子どもたちが、日常的に赤ちゃんや幼児を見たり、直接触れたり、世話をする経験が少なくなっており、命の尊さを学びとることが難しい状況にあるとの認識にたつて、市内の中学生(男女3年生)を対象に体験学習を実施している。

宇都宮市の実施状況を平成4年度から6年度までの3年間までをまとめると、以下のようなになる。まず、実施校では、平成4年が1校、5年4校、6年は5校と増えている。はじめの年の参加者(中学生)21名から120名に、さらには6年度には98名となっている。実施の時期は過去3年間は変わらず、1回目が6～7月、2回目を夏休みに行っている。場所は保健センターが使われていたが、昨年からは、1回目が各中学校で行われ、2回目に保健センターの乳児健診会場となっている。次に内容を見ると、1回目では講義やビデオスライドなどによる学習で、2回目(健診会場)に実際の赤ちゃん(4カ月児)に触れたり、母親の話を聞いたりしている。内容的には他の地域における体験学習と大きな差は見られない。ただし、2回目が乳児健診を利用しているため、詳細に乳児の発達過程や状態を目にすることができ、生徒たちの理解を図る上で望ましい場であると思われる。また、参加した生徒のほとんどが、体験学習を肯定的に受け止め、「小さな命の大切さがわかった」「親のありがたさが理解できた」「やさしい気持ちになれた」など学習後の気持ちを表現している。(感想文より)

こうした市によるこれまでの体験学習はおおむねその目的を果たしつつあると評価できるが、今後、さらに充実し、普及拡大させるためには、次のような課題が指摘されている。主なものとして、1.各学校・教育委員会との連絡がなお十分ではない。2.実施内容面での検討が必要である。(一貫

性) 3.赤ちゃんの確保が難しいことがある。4.教育現場の状況を踏まえた日程や内容の設定が課題などが挙げられる。

他の市では、茨城県の下妻市の資料が得られている。平成6年度を見るとまず、対象が高校生で参加はすべて女子となっている。体験学習の内容では、はじめに手作りおやつを作ることから始まり、次に場所を公民館から保育所に移して、園児と遊んだり、一緒におやつを食べるなどのふれあい体験を行っている。時間は約2時間程度で、その後性や妊娠、男女の体についての講義となっている。この体験学習に参加した生徒36人のうちほぼ全員が「良かった」「参考になった」と評価している。特に、実際に赤ちゃんとふれあったことについての評価が一番高く、学習の影響の大きさが感じられよう。他方、下妻市の体験学習の実施にあたって問題も少なくないとの指摘がある。まず、実施会場がはじめた当初保健センターであったが、ここでは乳幼児の母親がいるため、高校生とのふれあいが十分に行えず、後に場所を保育所に移している。また、実施者の立場からは1時間くらいの体験で「父性、母性の涵養」ができるのかどうか、なお疑問を持っている、などである。

指摘されるように場所の選定は体験学習にとって重要であり、時間も効果という点から検討する余地があるが今後は内容面での充実を図りつつ総合的な学習計画の設定に取り組む必要があるように思える。

市町村のうち体験学習を町が実施しているケースでは今回千葉県鋸南町と神奈川県城山町の2つについて資料収集や実施状況に関する聴取などの調査ができた。まず、千葉県鋸南町の体験学習は平成5年から実施されている。平成6年度では中学校在籍者461名のうち男女合わせて92名、高校は10名が希望して参加している。実施日は学期中が第二土曜日に、夏休みは一日保育として期間中生徒の都合のよい日となっている。体験学習の場は保育所を主に、乳幼児の検診(保健センター)や家庭教育学級の間が利用されている。事前の学習(講義)は行われず、直接乳幼児にふれる体験学習となっている。鋸南町では、他の地域に多く見られた学校との連携の悪さは少なく、比較的スムーズに運営されている。その理由としては、平成2年度から教育委員会と共催して育児支援学級や妊婦教室を実施し、お互いの連絡がとれる体制がすでにできていたためと見られる。

また、体験学習では保育所が中心となっているが、それは健診時では時間が短く、子どもにふれ

る機会が少なく、母親の中には不安を感じる人がいる。さらに保育所では親がいないため、子どもとの接触が多く持てるなど保育所での体験学習の利点を踏まえて実施している。現在保健センターと保育所が体験学習の場として利用されるケースが多いが、どの場を利用すると学習の効果が上がるのか検討する必要があるものと思われる。

また、事前に子どもの成長・発達やその特徴について基本的な事項を話しておくこともこれからは必要ではないか、といった指摘も担当者(保健婦)側から指摘されている。このパターンは保育所での体験学習に多く見られるが、子どもをよりよく理解するうえでも事前学習は行うべきであろう。

平成6年度の参加者を見ると、中学生男子と高校生の参加が増加しており、生徒たちも多くが前向きにとらえていることがわかる。参加したひとりの生徒は体験について次のように述べている。「私は今まで小さい子と遊んだことがなくて、どういふに接したらよいか分かりませんでした。また、小さい子はあまり好きではありませんでしたが、参加して楽しく子どもと遊べました」

この他、神奈川県城山町では、社会福祉協議会が中心となって、小学生・中学生をはじめ、ヤング(高校生以上の青年層)のための福祉体験学習(ふれあい体験学習)を実施している。

ここでの体験学習の内容を見ると、小学生は手話や目の不自由な人への手伝いを、中学生は障害者の介護の方法、高校生以上には訪問看護や施設・作業所の実習など社会福祉の分野における体験学習が主になっている。幼児とのふれあいはヤングふれあい体験学習の中に組み込まれている。内容として、「学童保育において児童にふれあい、理解を深める」となっている。

実施時期は夏休みを利用しているが、平成6年度でこの体験学習に参加した高校生は2名で、女子となっている。参加後の感想では学童クラブでの体験は「とても貴重で、充実していた」、「これからの将来を考える上でも大きなできごとでした」と評価している。

当面の課題としては、希望参加者への指導・助言のあり方をはじめ、関連施設との連絡・協力の問題、生徒の参加への動機づけの必要性が指摘されている。しかしながら体験学習の効果を高めるために、現行の社会資源の役割・機能を十分踏まえた場の設定を図る必要を求められてくるが、ここではこうした点が配慮され、目的にあった場が有効に利用されているといえる。

実施主体としては、先の市町単位に比べ規模は

小さいが、積極的に取り組んでいるケースのひとつに群馬県勢多郡富士見村がある。ここでは、中学校の家庭科の授業に保育所での幼児とのふれあい体験学習を取り入れている。そのため、全員が参加するかたちを取っている。体験学習に先立ち、授業で幼児についての基本的な学習を行っている。たとえば、動機づけにはじまり、幼児の心身の発達と特徴、生活や遊びの状況への理解などについて事前に学習し、保育所への体験に備え、おもちゃ作りをする。

保育所体験学習は2回で構成され、1回目に写真を撮ったり、遊んだりして幼児の実態の把握をし、2回目には各自の作ったおもちゃをつかって幼児と遊ぶといった内容になっている。その間生徒は決められたプリントに学習内容をいくつかの段階ごとに感想を記録し評価を行うようになっていく。この富士見村で実施されている体験学習では、事前学習に加え、それぞれの視点から観察を行い、記録をし子どもへの興味や関心を生徒に向けさせながら、ふれあい体験をさせている。これは体験学習を知識として生徒に与えるばかりでなく、子どもの実態をじかに把握するために極めて重要な方法といえる。

また、保育所では子どもの自然な姿を遊びを通して直接ふれられる点も教育効果が大きい。しかしながら学校との緊密な連携のあり方や人的・物的パワーが不足しているなど、課題も残されている。

比較的早くからこの体験学習に取り組んできた広島県(久井町他)での実施状況と比べて見ると、現時点では次のような点が認められた。内容面では、子どもの栄養から歯の衛生、発達の特徴遊びなど比較的広い範囲が短い日程の中に含まれている広島県に比べ、関東地域では直接乳幼児にふれあうための学習に比重が置かれている。また、今回調査した範囲では、関東地域の実施体の多くが参加者に中学生を対象としているケースが多く見られた。この他、今後の問題点では学校との連携の進め方をどうすべきか、が共通した課題として指摘された。

今回の各地域における実施体別の体験学習の実施状況調査について、まとめると次のようになる。

1. 体験学習の場が保健センターをはじめ保育所、児童館などさまざまであった。
2. 体験学習では講義や話、ビデオなどが中心になっている場合が見られるが生徒の評価はじかに乳幼児にふれたり、遊ぶことに集約的に見られ

た。

3. 中学生を対象とした体験学習での実施率が高く、男女の参加も高校生に比べ多い傾向が認められた。

4. 学校のカリキュラムとの関係や指導の方法などになお問題が残されている。

5. 全般に学校との連携をどう進めていくか、が今後の大きな課題となっている。

以上の点を踏まえつつ、今後は内容面での教育的評価や効果的な学習方法の創出が急務になっている。

思春期体験学習の短期効果

広島県賀茂郡河内中学校3年生男女が乳児健診に参加することによって、乳幼児との触れ合いを体験した。1回20名余のグループで全員が参加した。その短期効果を評価するために体験前後にアンケート調査と感想文の記載を依頼した。

1. アンケート調査による検討

「赤ちゃん」「育児」「親」等に対する意識、イメージについて調査した。2年間に実施された対象生徒計158名について体験前後で比較した。有意差検定には対数線形モデル分析を用いた。

赤ちゃんのイメージについて、体験前は弱い、やかましい、よく泣くなどネガティブなものが多いが体験後は、元気、たくましいなどポジティブなものが多くなっている。また、赤ちゃんの実態が認識され、しかも好意的認識となっている。

育児についての意識変化もあり、体験前多かつためんどう、忙しい、苦しいなどが体験によって楽しい、素晴らしい、幸せ等に変わっている。なかでも「素晴らしい」という認識が著しく増加している。

育児している母親の認識も大きく変わって、楽しそう、幸せそうという認識が著増している。

さらに注目すべきは、親についての意識の変化である。体験前は、うるさい、わずらわしい、注文が多いなど中学生らしい意識であるが、体験すると、「うるさい」が著減し「ありがたい」が著増している。その他、たのもし、楽しい、安心感などが増加している。

体験学習は中学生の心を大きく変容させた。赤ちゃんや育児といったことだけでなく、親への認識が著しく変化していることに意義がある。

2. 感想文の分析による検討

同校の男女生徒73名を対象として体験前後の「赤ちゃん」についての感想文を分析した。作文の文字数について比較すると、体験後の感想文の文字数は男女とも著しく増加している。男子生徒で 5.1 ± 6.5 倍、女子生徒で 3.2 ± 2.6 倍であった。このことは体験学習が生徒に大きなインパクトを与えたことを物語っている。

また、体験前後で赤ちゃんに関係する語句がどのように変化したかを検討した。男子では、体験前に多かった「うるさい」「きらいだ」が全く無くなり、体験前にはみられなかった「(育児が)たいへん」という語が現れた。「かわいい」という語は体験前にも多くみられたが、体験後はさらに増加した。女子では、体験前にあった「こわい」「泣く」といや「うるさい」が体験によって無くなり、体験前になかった「とまどう」という感想が新たに現れた。「すき」「かわいい」という言葉は体験前に多かったが体験後にはむしろ減少した。

これらのことは、体験学習によって「赤ちゃん」「育児」などを実体としてとらえるよになっていることを示し、また、特に女生徒は、これらを自分の問題としてとらえ始めていることをうかがわせる。

思春期体験学習の長期効果

体験学習が短期的には著しい効果を示していることが明らかにされたが、この効果が結婚年齢まで持続するか否かということは、この事業の意義を大きく左右させる点である。そこで、すでにこの体験学習が長期にわたって実施されている和歌山県、宮崎県、北海道、高知県、広島県の体験学習担当者に依頼して体験学習の長期効果の評価に関するアンケート調査を行った。また、対照として体験学習未経験者についても同様のアンケート調査を行った。回収率はよくなかったが、合計1,026部の回答を得た。今回は体験学習の経験者がすべて25歳以下であったことと、子どもをもたないものが大部分であることから、子どもをもたない25歳以下の男女755名(経験者486名、未経験者269名)について分析した。

意識の種々相について5段階評価の回答を求め、各段階を1から5の点数として各群の平均点数を両群で比較した。有意差はt検定によって判断した。その結果、体験経験者は赤ちゃんの世話をするのが好きであり、赤ちゃんをわずらわしく思わず、赤ちゃんから奇妙な感じをもたないということが

明らかにされた。また、育児については育児のために世の中から取り残されたとは思わず、育児が辛い仕事とは思わない、また育児をしている女性を疲れているとは思わないということが示された。

体験学習を経験して1~7年を経過していても、体験学習経験者は未経験者に比して赤ちゃんや育児に対して好感的立場にあることが明らかにされ、体験学習の長期効果が明らかに存在することが認められた。

実施主体者側からみた評価

思春期体験学習は、各地で種々の形態で行われているが、これらの実施形態と地域における諸条件を調査し、その効果の評価から、諸条件下において最も高い効果を期待できる方法を検討した。その結果は図1に示すように、対象生徒数が少なければ乳児健診を利用することが望ましく、対象生徒数が多くその地域における出生数が多ければ育児教室を利用するのが効果的である。また対象生徒数多く地域の出生数が少ない場合には、保育所で行うのが効果的である。

また、平日にするか休暇を利用するかに関しては、平日に行くほうが参加者数は多いが、学校との日程調整に困難をとまなう。休暇に実施すれば、学校との連絡調整は容易になるが、多くの参加者数は期待できない。

実施上の問題には、学校、保健所、保育所、市町村、などの相互理解と関係が円滑に行われ難いといった問題がある。さらに、母親の理解が得難い場合があるなど、解決されなければならない点も多い。

まとめ

思春期体験学習の評価について、国際的動向を検討し、評価に関する調査票の作成、親になることへの受容の問題など、基礎的なものから、体験学習の短期および長期効果などまで、幅広く研究した。

体験学習またはこれに類似した活動は外国では未だ行われておらず、この事業の検討は健全な青少年の育成について国際的啓発となるであろう。

また、子どもとの触れ合い体験が親となること

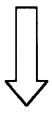
への受容を生むか否かに関しては青年期のライフスタイル志向との関連において検討する必要のあることが示唆される成績を得た。

短期、長期効果についてはいずれも著しい効果のあることが示され、7年余の経過後においても、育児、赤ちゃんに対して好感的意識の継続のあることが認められた。

実施主体者からの評価とその実施形態、実施地

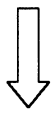
域における諸条件との調査により、地域条件に適合した方法のあることが示唆された。

望まない妊娠防止について直接的効果の認定はなされていないが、育児、子どもへの受容的意識の涵養がなされていることから、望まない妊娠防止に効果的であることが予想される。今後、妊娠人工中絶に対する認識等の調査を含め直接的判定についても検討したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

最近、妊婦の妊娠初期からの行動変容を研究した報告では、妊娠中に子どもへの愛着を感じるものは極めて少なく、出産後子どもへの愛着が十分育たないものが多いという。また、妊娠中子どもに対して抱いていた幻想的なかわいさが、出産後の現実のなかで打ち破られ、不安、いらだちを感じるものも多い。このことは、自分の子どもが生まれてはじめて子どもというものに接することが一般的である現代社会の中にあっては当然のことといえるかも知れない。しかし、このような状態の中において満足な育児行動は期待し難い。この問題の解決が要求されている訳であるが、思春期にある男女の乳幼児に対する感情は、子どもとの接触経験や親準備教育によって著しく好転するといわれている。

子どもの親となるために十分な準備状態を醸成させるための一助として、思春期にある中・高生に赤ちゃんの触れ合いを体験させる事業が市町村事業として厚生省から提唱され、全国各地で試みられている。しかし、これが期待された機能を十分果たしているか、子ども受容をかえって阻害していないか、最も効果的な学習方法はどのようなものなのか、また効果があるとすればいかなる機序によるものなのか、などといったことは未だ十分明らかではない。

今回構成された本研究班ではこれらの問題点を解決すべく多方面からの検討を企画し、さらに短期、長期にわたる検証を試みた。